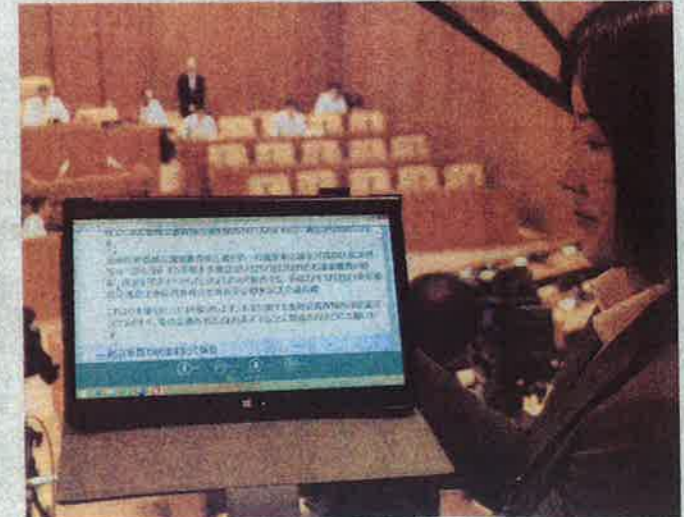


音声同時翻訳ソフトなど実演



先月行われた統一地方選で、「筆談ホステス」として知られる斉藤里恵さん(31)写真が当選した北



音声同時翻訳ソフトで文字化された質問などが映し出されるタブレット端末。北区(今仲信博撮影)

北区議会、聴覚障害者へ対応

北区議会は25日、聴覚障害者への対応として、区議会本会議や委員会へ導入する音声同時翻訳ソフトなどの実演を公開した。区議会事務局によると、

こうしたシステムの導入は全国初。デモンストレーションでは本会議を想定し、議員や区長らに扮した区議会事務局職員が、質問のやりとりなど一連の流れを実施。聴覚障害を持つ議員役の質問は音声変換ソフトで読み上げられ、区長役らの発言は音声同時翻訳ソフトで文字にされ、区議会が貸与するタブレット端末の画面に映し出された。26日の区議会臨時会から導入され、タブレット端末は聴覚障害を持つ傍聴者にも貸与される。

デモンストレーション終了後、報道陣の取材に応じた斉藤さんは、音声変換ソフトとボードを駆使し、「ソフトの使用が認められ、聴覚障害というハンディキャップを乗り越えて議会活動が可能となった。議会からバリアフリーが進んでいることを実感している」と述べた。

発言素早く文字変換 聴覚障害議員を支援

官公庁へ地域防災計画のコンサルテイングやソフトウェア開発などを手掛ける宮崎市のMJC(川崎友裕社長)は、会議での発言を文字に変換して、タブレット端末に表示するシステムを構築、東京都北区議会へ納入した。「筆談ホステス」として知られ、先月の同議会選でトップ当選した聴覚障害のある斉藤里恵さんの支援が主な目的で、議会では全国初。26日の臨時議会から運用される。

東京都北区議会 本県企業システム構築

Wi-Fi(ワイファイ)を使いタブレット端末に素早く表示される。パソコンには、地名や人名、略語など約300の単語を登録し変換率を高めている。タブレット端末は斉藤さんのほか、聴覚障害のある傍聴者などにも貸し出される。

同区議会事務局が、斉藤さん当選を受け、同区の防災訓練の立案、研修などに携わっていた同社へ相談。約2週間の短期間で実演を繰り返し、周囲でヤジが飛び交っても支障がないことを確認、文字への変換率は9割を超えているという。同社によると、実験に立ち会った斉藤さんは「一つ一つ誤変換があっても、前後のつながりで十分分かる」と喜んでいただいた。

本会議用、委員会用の2セットで400万円。既存の音声設備を活用することで費用を抑えた。同社は「今までのノウハウを発展させて、コミュニケーションのバリアフリーを推進させてい」としている。

斉藤さんの発言は、自身のパソコンを使い、入力した文章を音声に変換し、議場に流される。

議場での発言を即座に文字に変換し表示したタブレット端末。25日午後、東京都北区議会

筆談区議 議場変える

東京・北区の斉藤さん、26日本会議デビュー



東京都北区議会の会派控室で筆談する斉藤里恵さん。銀座のクラブのホステス時代に筆談での接客が話題となり、自叙伝がテレビドラマになった

音声文字化システム導入

「筆談ホステス」として知られ、4月の東京都北区議会選で初当選した斉藤里恵さん(31)が本格的な議会活動を開始した。聴くことが難しく話すこともできず、手話も苦手で筆談が得意な彼女が、区議会の聴覚障害者議員としてデビューする。T機器を26日の本会議から導入する。区議会によると、導入は全国で初めて。

区議会の会派控室に、12歳を推測する筆談機が使用されている。広い議場では発言者一人一人の発言が聞き取れない。議員は手話で発言し、区議会の会派控室に設置された筆談機が、発言内容を文字に変換し、タブレット端末に映し出される。議員はタブレット端末を見ながら発言し、傍聴者はタブレット端末で発言内容を文字で読むことができる。

斉藤さんが「二人会派と他会派で情報量が異なるようにしてほしい」という要望があり、区議会の電子筆談機に書き留められた発言内容を、タブレット端末に映し出される。発言者はタブレット端末で発言し、傍聴者はタブレット端末で発言内容を文字で読むことができる。

兵庫では手話通訳

厚生労働省によると、2011年時点で聴覚障害者は全国約24万人、うち約10万人が筆談が得意な人。同省の調査によると、筆談が得意な人は約10万人、筆談が得意でない人は約10万人。筆談が得意な人は約10万人、筆談が得意でない人は約10万人。

聴覚障害議員も「聞こえる」「話せる」

北区議会は二十五日、全国で初めて議場で導入する聴覚障害者向け支援システムの実演を報道陣に公開した。パソコンやタブレット端末を活用し、音声と文字を変換する仕組みで、聴覚障害のある議員が「聞く」「話す」ための環境を整える。耳が不自由な斉藤里恵議員(三)が本会議に初めて出席する二十六日の臨時会を前に、職員らが議長や議員と書かれた札を下げ、システムの運用方法を説明した。(中村信也)



「区議会は事前に入力された「区議会議員は区民の代弁者」という文章が音声に変換され、議場に流れた。

区議会事務局は変換の精度を上げるため、人名や地名、議会用語など約三百の単語をソフトに登録しており、事前のテストでは音声認識の精度は90%以上だったという。

ただ、誤って変換されてしまうケースもある。この日は書記が区長の招集告示として、「東京都北区長/記/一つ/日時...」などと読み上げたうち、「記」が「軌」と誤って表示された。単語を間を置いて読むと誤変換が生じやすくなるという。音声と文字表示の時間のずれにより、採決時に起立するタイミングを逃さないかの懸念もある。

北区議会

全国初の支援システム公開

担当者は「ひどい誤変換がある場合は障害のある議員に伝えたり、採決時にサポートしたりする」ことを考えている」と話している。



タブレットに文字変換された議員の質問